

ニュータウンと旧集落の交流、資源活用による地域の活性化

—大津市仰木地域をケーススタディとして—

京都大学大学院農学研究科	森 大顕
NPO 法人コミュニティ・デザイン・センター	浅野 智子
滋賀県立大学地域づくり調査研究センター	秦 憲志
NPO 法人H C C グループ	末富 孝也

1 研究の背景と目的

ニュータウンは、自然環境の豊かな都市近郊に位置し、世帯構成、所得階層などが類似した住民で構成され、町並みや用途指定も統一された、社会的にも空間的にも均一な地域である。さらに、新たな居住域で地域としての歴史が浅く、固有の文化が見出しにくい。こういった特徴ゆえ、緑豊かな田園都市を体現しているが、賑わいや面白さにかけるまちといわれている。

他方、都市近郊の農村集落には、長い年月をかけて育まれた豊かな自然環境や地域固有の文化や景観が存在している。しかし、こうした豊かな環境を維持してきたのは、伝統的なしきたりを重んじ、やや閉鎖的なコミュニティといわれる。近年、高齢化と農業離れによる後継者不足のため自然環境や文化、景観が維持できなくなっている。

このように、いずれの地域も社会的、空間的に地域内の自助努力では解決できない課題を抱えている。そのため、たとえばニュータウンにとっての農村集落の野菜や伝統行事、農村集落にとってのニュータウンの住民、さらに両地域周辺に位置する大学や専門家などの、地域外部からもたらされる資源の活用に注目すべきであろう。

本研究では、ニュータウン、農村集落の両地域の活性化において地域外からもたらされる諸要素を外的資源と捉え、特に、両地域間での資源の流れに着目する。そして隣接するニュータウンと農村集落の相互の資源利用により、両地域の外的資源を活用したプログラムが行われた滋賀県大津市の仰木地域を例にケーススタディを行い、外的資源活用の効果を明らかにすることを目的とする。

2 仰木地域と外的資源を使った取り組みの概要

2-1 大津市仰木地域

対象地である仰木地域は、図1のように京都府との県境に位置し、比叡山系と琵琶湖にはさまれ、豊かな自然環境が存在する。地域の山手には、平安時代からの歴史を持つ農村集落（以下、旧集落）があり、琵琶湖側には、仰木の里ニュータウン（以下、ニュータウン）が存在する（図2参照）。

2-3 仰木（旧集落）

この旧集落は、長い歴史を持ち、点在する地蔵や庵といった史跡、伝統的な宗教行事、山道の草刈や水路

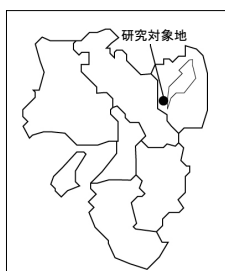


図1 対象地の位置

の清掃といった地域整備に関する共同作業など、伝統的な生活文化が根強く残っている。さらに、地域の周辺には棚田が広がり、中でも馬蹄形の棚田は全国的にも有名である。このように旧集落には豊かな自然的、社会的資源が存在している。しかし、高齢化や若年層の流出によりその棚田の維持管理ができなくなりつつある。

2-2 仰木の里と仰木の里東（ニュータウン）

旧集落に隣接するニュータウンは、仰木の里と仰木の里東という町目で構成され、旧住宅都市基盤整備公団（現都市再生機構）が開発した面積が188.8ha、計画戸数4,000戸、計画人口14,000人の大規模なものであり、1980年代より分譲が始まった。用途指定は大半が住居系で、教育・研究施設は幼稚園から大学まで配置されており、公園も大規模な都市緑地が整備されている。しかし、コミュニティ施設が少数で未整備という課題を持つ。また、ニュータウン全体の高齢者の割合は10.7%であるが、これは仰木の里東が現在も分譲中であり若年層が入居するため、初期に分譲された地区（仰木の里1丁目）では16.8%と高齢化が始まっている。

2-3 取り組みの概要（全国都市再生モデル調査）

本稿で事例として取り上げるのは、平成18年度の全国都市再生モデル調査として行われた「新旧住民交流による仰木里山ミュージアムの推進調査」という事業である。この事業は、旧集落では、「棚田景観の保全と創造」、ニュータウンでは、「農と食のプログラムづくり」という2つのテーマで、さまざまなプログラムを行い、旧集落とニュー

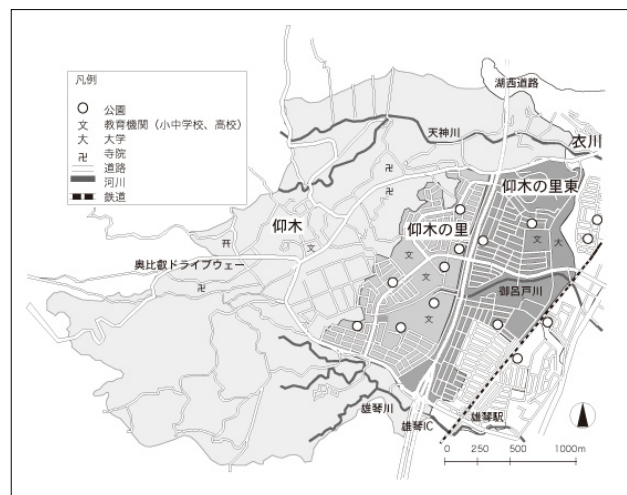


図2 対象地の周辺地図

タウンの両地区の交流を展開するものである。旧集落とニュータウンの双方の住民により実行委員会をつくり実施し、なお、NPO および大学が事務局をつとめた。事業全体の構成とスケジュールを表1に示す。

表1 事業の構成と各々のプログラム内容

場所	事業名	概要	参加人数
旧集落	棚田の景観調査の実施	親子で棚田ウォッチングと農家との交流（8月）	15人
	棚田（放棄田）の復元プロジェクト	ニュータウン住民のグループによる棚田でのもち米とそばの栽培・収穫（4月～2月）	田植えと収穫は平均約25人、草取りは約10人
	棚田米のブランド化と流通基盤の整備	棚田での生産者グループと消費者グループの連携による棚田米のブランド化（10～2月）	
	仰木・棚田里山アート展の開催	デザイン専門学校との連携による里山と棚田をテーマとしたアート展（11～2月）	3日間平均43人
	棚田景観の保全と創造に向けたフォーラムの開催	生産者と消費者による棚田景観の保全と創造に向けたディスカッション（2月）	51人
ニュータウン	コミュニティ農園の運営	ニュータウン近隣農園による野菜作りと収穫パーティの開催（5～11月）	畑作業は平均約10人、収穫パーティは平均20人
	食文化（お雑煮）調査とお雑煮フェスタの開催	お雑煮の分布調査（11月）とお雑煮博覧会（1月）	180人（フェスタ）
	コミュニティ施設の社会実験	コミュニティサロンの1ヶ月常設運営（2月）	1ヶ月間平均約20人

4 研究の方法

事業では多数のプログラムが行われたが、本研究では、旧集落とニュータウンの資源の交流が主軸で、アンケート調査を行い量的なデータが得られた棚田もち米プロジェクト（以下、もちプロ）、仰木・棚田里山アート展（以下、アート展）、コミュニティ施設の社会実験（以下、コミュニティ実験）の3つのプログラム（表1、網掛け部分）を取り上げる。次章以降より、旧集落でのプログラムと、ニュータウンでのプログラムを分けて検討していく。

調査方法は、いずれのプログラムも参加者に調査用紙を配布し、記入を呼びかける形で行った。各々のアンケートの回答者数と年齢構成について示す（表2）。

表2 各アンケートの回答者数と年齢構成

		もちプロ	アート展	コミュニティ実験
性別	男	6	18	28
	女	6	24	65
	不明	0	1	2
年齢	10歳未満	0	0	51
	10歳代	0	2	0
	20歳代	0	6	0
	30歳代	1	4	7
	40歳代	5	6	12
	50歳代	2	6	4
	60歳代	2	14	11
70歳以上	2	5	8	
	計	12	43	93

5 旧集落での外的資源活用プログラムの効果

5-1 もちプロ概要

旧集落では棚田保全のために都市住民等との交流に力を入れてきた⁽¹⁾。もちプロは、ニュータウン住民が運営主体となり地元農家の指導協力のもと、棚田を復元し、農作業体験を行うとともに、都市住民を対象に鏡餅作りやそば打ちなどの体験を行っている。参加は会員制であり会員は約30名である。活動場所は旧集落の平尾地区に所在する棚田である。

5-2 もちプロでのアンケートの結果

もちプロの12人のメンバーから回答を得た。その結果は、回答内容より表3のように5項目に分類できた。

(1) 年齢構成

参加者は中高年に集中しており、中高年の農作業や農村への関心の高さが伺える。

(2) 活動への評価

活動への評価では、農作業を通じて食べ物の生産過程の大変さや、集落の伝統文化への理解が深まったことが挙げられ、旧集落の自然環境と生活様式との関係への理解が深まったといえよう。また、ニュータウンでの交流が生まれたことも評価されており、共通作業を行なうことで参加者

同士の親交が深まったことがうかがえる。子どもへの教育効果も評価され、環境教育や食育などのプログラムとしての可能性が示唆された。活動の課題としては、メンバーを増やすことや活動を継続することがあげられていた。これは実際の農作業の大変さが実感されたためであろう。

5-3 アート展概要

京都芸術デザイン専門学校は旧集落住民の支援により、仰木の里山整備活動を行って、その経験を制作活動に反映する取り組みを6年にわたり継続し、両者は連携を強めてきた。本プログラムは、同校の里山整備活動を体験した学生が展示作品の還元と、旧集落の民家等の活用を目的としており、公民館と民家3件を提供することで行われた。同展では、他のプログラムでブランド化を行った棚田米のパッケージデザインも展示された。

表3 もちプロ参加者のプログラム評価

米づくりへの理解が深まった	<ul style="list-style-type: none"> ・ 収穫までの苦勞や現在の農家が抱える問題について肌身で感じることが出来た ・ 1粒のお米が出来るのに沢山の行程が必要なのが肌で感じられた。米づくりを通じてもの大切さが更に深まった。 ・ 自然の営みの一部に自分があると感じられたこと、子供たちにもぜひ経験してもらいたい、食物はスーパーで買うものでなく、総てのものが人の手にかかっているものということ、感謝の念をもってほしい。 ・ 田畑を耕作しなければならない大切さ、継続の難しさ、土に触れることで大地と会話しているような感覚を味わえる。収穫の喜び等日々新たな体験が出来る。
旧集落の生活や伝統文化への理解が深まった	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仰木の方たちとふれあうことにより、伝統的な文化や習慣にふれることができた。 ・ ニュータウンでは人のかかわりを嫌う人もいますが旧仰木のかかわりをうれしく思います。 ・ 生まれ故郷に良く似た伝統で共通点と相違点が見れて興味深い。 ・ 地元農家の方達と交流ができて米作りのノウハウや祭りなどに誘っていただいで仰木の伝統文化が多少なりに理解できた
ニュータウンでの交流がうまれた	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろんな人と交流を持てたこと。 ・ 皆で協力しながら楽しく取り組めたこと。 ・ もちプロに入っていなかったら知り合えなかった人々との会話が大変楽しい。人と知り合うという大切なことを得ました。 ・ ことばだけで無く同じ体験が出来る仲間作りが出来た。 ・ 一人の人間だけでなく家族同士の交流。目的を一にした者同士の良い楽しみ、安らぎ、得る物は多い。
子どもへの教育効果があった	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供達に非常に貴重な体験をさせることができ、将来にきつと役立つと思います。 ・ 他の子供達は体験出来ない、土と接することが出来、自然の大切さを、体をもって体感したと思います。
活動の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ もう少しメンバーを増やし活動内容を充実させることが課題。 ・ メンバーを増やし仰木地区全体との連携が取れること。活動が永年継続されること。

5-4 アート展でのアンケートの結果

来場者数調査とアンケート調査の結果を表4、表5に示す。アンケートは43人から回答を得た。表4のように、得られた意見は、棚田の保全については3項目に、古民家の活用については2項目に分類できた。

(1) 年齢構成と会場へのアクセス

来場者は60代が最も多く、50代以上で半数を占め、もちプロと同様で、中高年の関心の高さが伺える。次に来場者の住所は大半が旧集落の外部の人々であった。大津市内や隣接するニュータウンからの来場者が多かった。会場までの交通手段は自動車や徒歩が多く、公共交通機関ではアクセスしづらく不便であり、交通手段の確保が必要である。

表4 アート展会場へのアクセス

住所	仰木	8
	仰木の里	10
	その他の大津市	16
	その他の滋賀県域	3
情報入手経路	他府県	5
	新聞	8
	大津市の広報	2
	ダイレクトメール	0
	インターネット	0
	チラシ	4
	口コミ	13
その他	15	
交通機関	徒歩・自転車	13
	バス	4
	自家用車	21
	その他	4

(2) 棚田保全や古民家活用への意識

来訪者の意見を旧集落住民の意見とその他からの来訪者（以下、都市住民）の意見とに分けて分析していくこととする。

棚田保全に関しては、旧集落住民からは、農業問題を知ってほしいという切実な意見が聞かれた一方で、旧集落住民の関心を促す意見も聞かれた。また具体的な活動に関

表5 棚田の保全と古民家を活用した取り組みへの意識

棚田保全について	棚田の維持の 大変さ・地元 の取り組みの 大切さ	<ul style="list-style-type: none"> * 現下の農業問題になやむ地元農家の実情を深くよく観察してほしい。 * 地元民がもう少し関心を持つ事が大事だと思う。 ・ 仰木住民の今後の活躍を期待する。 ・ 地域の人たちに力をあわせて頑張してほしい。 ・ 見えない苦労の部分が見えるようにする事が大切。アート展は、苦労の部分を手伝いしているのがとても良いと思う。
	都市との交流 の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・ たくさんの人の関わりが必要。 ・ 都会からボランティア募集をしてはどうか。 ・ 以前に農業ボランティアに参加しようと思ったが時間的な制約でできなかった。気軽に参加できる取り組みがあれば良い。 ・ 棚田の保全は、防災の面などからも全国的に問題となっていて、棚田オーナー制度などの取り組みが広まりつつあると聞いています。持続可能な滋賀をつくっていくことを考えれば、農業離れは深刻な問題ですが、農業に関心を持つ人は意外と多いと思いますので、もっと若者や他の土地の人が仰木の棚田で農作業のボランティアなどが気軽にできる仕組みができればいいと思います。
	大学との連携 の可能性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生たちの取り組みに感心している。NHK放送の英語版など映像でも紹介され嬉しい。 ・ 若者が主導する地道なイベントの積み重ねがきつと実を結ぶはず。継続こそ力なり。 ・ ものづくりや芸術の原点は農業にあり。教育に取り入れてほしい。
古民家の活用 について	交流への期待	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地元の人とお話できる仲になっているのが良い。 ・ 田舎家への憧れがあるので、もっと仰木の集落の人との交流があれば良いと思う。 ・ 地域の活性化につながっていくと思う。
	貴重な体験	<ul style="list-style-type: none"> * 仰木で開催するなら、仰木に昔からある藍染や麻の布などを見せてほしい。 * 地域の人を窓口においてほしい ・ 立派な建物や庭園を拝見できて良かった。 ・ 民家や庵を見せていただくことで、より身近に感じられた。

*は旧集落の住民、・はその他からの来訪者の意見

しての記述も少なく地域として取り組みの方向性が見えていない様子も伺える。地元住民は、問題意識を持ち取り組みを行っている人と無関心な人に二分されていると考えられる。

都市住民の意見は、大学や都市住民のボランティアとしての力を利用したプログラムの必要性やこうしたプログラムへの参加に興味を示す意見が聞かれた。地域外の人には農村集落に興味を持ち、力をかしたいという人が多いようである。

次に古民家を活用した取り組みについてであるが、旧集落住民からは、仰木に独特のものを展示してほしいという意見や地域の人を窓口にしてほしいという意見が聞かれ、集落のことをより知ってもらいたいという意欲と、窓口を地域の人にするにより地元住民も関わりやすくなることへの期待が述べられた。

都市住民からは、日頃、民家や庵に入る機会がないことから好評を得ている。また、旧集落の住民との交流を期待する意見があった。さらに、会場提供者の自宅で作った干し柿や餅をふるまったり、味噌づくりについて説明するなどのおもてなしが大変好評であり、会場提供者もこの交流を楽しんだようである。

5-5 プログラム効果の考察

今回の調査で、ニュータウンなどの外部の人々が、旧集落に興味を持ち、旧集落を知ることの有意義だと考えているため、今回のような旧集落の農作業や空間を体験するプログラムへ期待は大きい。また、旧集落でも都市住民をボランティアとして受け入れる取り組みへ期待しており、農作業や間伐の体験プログラムを開催することは旧集落の文化的、空間的問題の解決に繋がるものと考えられる。

一方で、まだまだ、旧集落住民はこれらの問題への関心がやや薄く、地域としての取り組みが見えていない状況がうかがえた。しかし、実際に都市住民と交流することで、関心が薄い住民への取り組みの周知や、地域の魅力を再発見するきっかけとなり、今後の取り組みの方向性が得られることに繋がることが考えられる。また、都市住民との交流が楽しいことを認識することは、閉鎖的な旧集落に都市住民を受け入れる基礎作りとなるであろう。

6 ニュータウンでの外的資源活用プログラムの効果

6-1 コミュニティ実験概要

高齢化の進みつつある仰木の里1丁目では、都市再生機構が所有する建物を住民が集会所として利用している⁽²⁾。このプログラムは、その集会場を1ヶ月間、10時から17時まで開放し住民の交流拠点とする社会実験である。期間中はさまざまな催しを行い、旧集落の食物を売る野菜市や、それらを使った昼食会も行った。さらに、大学と連携した学生が似顔絵を描くイベントや福祉行政関係者による催しなど、旧集落以外の外的資源を利用したプログラムも行われた。運営はふれあいサロン活動を3年間継続している住民団体が担った。

6-2 コミュニティ実験でのアンケート結果

95人からアンケートを回収した。各プログラム参加者のうちでそのプログラムを楽しかったと回答した人の割合を企画満足度(%)として集計した。これらの結果を表6、表7にまとめた。

(1) 来訪者属性

来場者は男性よりも女性のほうが多く、年齢では、来訪者は小学生と中高年に大別された。中学生以上から30歳未満までの参加者は皆無であった。男性参加者は中高年層に集中していたが、女性の参加者は中高年から比較的若い層まで分散している。これは男性の参加者は退職者層であり、女性の参加者は、中高年のほかに、駄菓子屋を買いに来た子どもに付き添った母親や、サロン運営を手伝っている主婦が含まれるためである。

(2) 会場までのアクセス

1丁目と2丁目に住まいがある人が多く訪れており、また、徒歩でサロンに来ている人が多かった。これは、来訪者に高齢者の人が多かったからだと考えられる。

(3) プログラム評価

今回行ったプログラムの半数以上が外的資源を利用したものであった。それらは、旧集落や行政機関、近隣の大学に由来するものであった。

開催プログラムの中で参加者が多かったのは駄菓子屋、野菜市と昼食会の順であった。特に駄菓子屋が好評であった。これらは駄菓子や地元の野菜といったニュータウンにない要素をもつ企画である。

満足度では、ヨガ教室や健康体操、パソコン教室が高い支持を得ていた。これらは話を聞くだけでなく、自分でも何かをする能動的なプログラムである。コミュニケーションを目的とした喫茶や昼食会も高い満足度を得ていた。

また、野菜市は満足度が低かったが、運営スタッフ不足で、人とコミュニケーションをとることのない無人販売所となっていたためと思われる。

6-3 プログラムの効果

この社会実験では、交流拠点から徒歩圏域を中心に、中高年の男女や小学生といった地域

表6 コミュニティ施設へのアクセス

住まい(人)		交通手段(人)	
1~2丁目	61	徒歩	54
その他仰木の里	30	自転車	34
仰木の里東	2	自動車	16
その他(不明)	2	バイク	0
		その他	6

表7 プログラム評価

分類		合計	満足度(%)
外的資源を利活用	ヨガ教室(仰木の講師)	6	83
	健康体操(社協関係者派遣)	6	83
	昼食会(仰木の野菜)	21	76
	似顔絵会(芸術大学学生の支援)	7	71
	仰木の野菜市	21	43
	社協講演会(社協関係者派遣)	9	33
それ以外	駄菓子屋	61	100
	パソコン教室	12	100
	喫茶	12	92
	勉強会(NT内部)	13	69
	お菓子作り	4	25
	その他	1	0

での生活時間の長い住民がプログラムに参加した。

次に、各プログラムに関しては、外的資源を取り入れたプログラムをはじめ、駄菓子屋などのニュータウンにない要素を持ち込んだものに多くの人が訪れており、外的資源を積極的に利用することで、多くの人にアピールできる魅力的なプログラムを開発できる可能性がある。運営団体はこれまで、旧集落や大学との関係は持っておらず、今回の事業をきっかけに協力できる連携が生まれたといえる。今回訪れていなかった若年層や潜在する中高年の参加者へアピールできるプログラム開発のためのニーズ把握と、野菜市などの満足度が低かったプログラムの開催形態の検討も必要であろう。

7 総括

外的資源を利用したプログラムにより、旧集落では、棚田や里山など空間的な問題解決の可能性が示唆され、ニュータウンでは旧集落などの外的資源を利用した賑わいづくりの可能性が示された。

本事業では、旧集落、ニュータウン、NPO、行政関係者、大学、といった、多様な主体の連携により多彩なプログラムが可能となった。また、そのような多様な主体が協力して行うことで、活動のノウハウを得たり、活動の方向性を得ることに繋がるのが考えられる。

特に旧集落の人々は、外部の多様な主体と協働して、都市住民との交流を企画・運営する経験が乏しく、今後、NPOの支援や大学やニュータウン住民などの協力の下、地域の企画力を高めていく必要がある。また地域内部では、現在は、一部の住民が、棚田や里山を開放したり、指導したりする活動を担っているが、本事業を契機に、地域全体で事業を進める体制作りが求められる。

他方、ニュータウンに関しては、住民による集会場の買取りが決まり、住民による運営の仕組みや体制づくりが必要となるため大学や専門家による支援が望まれる。また、今回、利用した集会場では施設の部屋数や調理場などの設備内容が不十分であり、多様なプログラムに対応するための施設への改修が必要であるが、多額の資金が必要となるため、行政や都市再生機構との連携が不可欠であろう。さらに、拠点施設の配置では、徒歩圏域毎の整備が求められ、本事業の仰木の里でもさらに施設を充足する必要がある。

最後に、今回の事業では、NPOが地域と地域外の主体や資源をつなぐコーディネーターの役割を果たしていた。今後、行政や大学などの他の主体と比較して地域との関係づくりや事業を展開する上での資源・能力の違いからそのあり方を検討していくことが重要であると考えられる。

補注

- (1) 仰木では中山間地域等直接支払制度で都市住民等との交流により体制整備単価が交付されている。
- (2) 旧住宅都市整備公団が住民に買取りを求めていたが、平成19年3月上旬に集会所の買取りに関する住民投票が実施され、住民が集会場を買取りすることが可決された。